

今月号に掲載の講座一覧は、市ホームページでもご覧いただけます。詳細情報やチラシを掲載している講座もありますので、ぜひご確認ください。



柳沢公民館	柳沢1-15-1	☎042-464-8211	kouminkan@city.nishitokyo.lg.jp	谷戸公民館	谷戸町1-17-2	☎042-421-3855	yato-kou@city.nishitokyo.lg.jp
田無公民館	南町5-6-11	☎042-461-1170	tana-kou@city.nishitokyo.lg.jp	ひばりが丘公民館	ひばりが丘2-3-4	☎042-424-3011	hibari-kou@city.nishitokyo.lg.jp
芝久保公民館	芝久保町5-4-48	☎042-461-9825	shiba-kou@city.nishitokyo.lg.jp	保谷駅前公民館	東町3-14-30	☎042-421-1125	ekimae-kou@city.nishitokyo.lg.jp

戦争と平和について考える

毎年4月12日は「西東京市平和の日」です。昭和20年のこの日、1トン爆弾が田無駅前、保谷町などに多数投下され100人以上の方が亡くなりました。こうした惨劇が繰り返されないよう「西東京市平和推進に関する条例」の中で定められています。

ロシアによるウクライナ侵攻が続く中、公民館では戦争と平和について考える事業を行ってきました。今号では昨年度に実施したもののから2事業について報告します。

谷戸公民館主催 暮らしを豊かにする教養講座
令和4年10月23日、
11月5日、11月12日実施
「音楽×平和」

コロナ禍で街から音が消え、戦火で音楽どころではない時代からこそ、音楽の大切さに気付かされました。「音楽×平和」は音楽をつくる人たちの想いを聴く講座です。

第1回 OKINAWA×音楽

宮古島出身の音楽学者友利修さんは、「沖縄の文化や音楽が異国のように感じられるのは、沖縄は日本でもなく中国でもない海洋貿易の独立国の歴史を持っていったから」と語ります。

三線奏者豊岡マッシーさんは沖縄復帰50周年に「タカラぬシマ」を発表しました。「今でも沖縄人という絆は日本人というよりも意識します」。太平洋戦争後、米軍占領下では伝統音楽に加えて、米軍がもたらした本場のロックが独自のダンスパブルな音楽を作ってきました。復帰後は日本の音楽シーンを席巻します。一方で、島唄や舞踊も世代を超えて愛され、複合的な文化は「OKINAWA」の今を表しています。「音楽は沖縄が背負われた歴史を表しています。そしてその歴史は終わっていないのです」。

第2回 音楽家×平和

アカデミー賞作曲家の住友紀人さんは《沈まぬ太陽》や《アンフェア》など多くの映画やテレビ音楽を作曲してきました。受験の失敗がきっかけで、ジャズに憧れバークレー音楽大学へ旅立った背景には、画家としての将来を戦争によって絶たれた祖父への想いがあると言います。「戦争は命だけでなく、その次の世代の夢まで奪ってしまふ。私は祖父や両親の分までたくさん新しい音楽をつくり、戦争のない自由で平和な世界を守りつづけていきたい」と語ります。

住友さんは、ドラマ《ナイフの行方》のテーマ曲をソプラノの住友里奈さんと親子初共演で演奏しました。重い過去を背負う初老の男が、自暴自棄に生きる若者と出会い葛藤し、新たな家族を持つドラマと共鳴するこの曲は、親子の絆の確認でもあり、世代を超えた生き方を訴えるものでした。

第3回 ハープ×癒し

日本では珍しい中世ハープ奏者、小坂理江さんは語ります。「音楽は人と人の架け橋となり、傷み欠けた心の癒しになります。中世のハープは、和音を奏でることから、世界の秩序を調和し、人の心の揺らぎも調和させる楽器でした。聖書にも登場するハープは、後には貴紳・貴婦人の愛好する楽器となりました。

その音色はたおやかで繊細、耳を澄ませれば聴こえてきます。「静寂の中の一筋の光のような弦の音に魅せられてハープを始めました。その響きは《弦のおと Son das Cordas》で体験できます。「心の癒しは、静ひつに耳を澄ますことから得られます。ハープを奏でること、自分の心に問いかけること、これもできません」。

参加者の感想

「沖縄を単なる観光地ではなく独自の素晴らしい国ということとを理解できた」、「芸術は平和に必要。人間がこんなに愚かなのかと思う。戦争は避けられないものでしょうか」、「おだやかな音が体にしみ込む。響きの調和を人生に生かしていきたい」。久しぶりの生演奏を聴き感動したり、音色に癒されたりしながら、調和ある世界について考える講座となりました。



第3回 ハープ×癒し



第2回 音楽家×平和



第1回 OKINAWA×音楽

芝久保公民館主催 平和を考える講座
令和4年12月11日実施
「この町にも戦争があった」
戦跡フィールドワーク

芝久保公民館では例年「平和を考える講座」を実施しています。今年度は武蔵野地域の戦争の歴史を研究している牛田守彦氏を講師に迎え、講話と戦跡フィールドワークの形で開催しました。

参加者は幅広く、親子、祖母と孫、転入間もない家族など10〜80代の21人が集まりました。なぜ西東京市が激しい空襲被害を多く受けたのか？

西東京市は中島飛行機武蔵製作所(中島飛行機株式会社武蔵野製作所)と多摩製作所が、昭和18年に政府の指導により合併して誕生したエンジン組立工場)の北側に位置していたからです。日本の軍用航空機発動機の3割近くを生産した同工場は、米軍の日本本土空域における最大目標のひとつとなりました。そして米軍の未熟な空爆の技術と南から進入する飛行コースにより、特に工場の北側に位置する西東京市域に投下が集まることになったのです。中でも昭和20年4月の空襲被害は大きく、2日夜間空襲、7日、12日には1トン爆弾による空襲がありました。しかし、12日は春霞のために目標を大きく外れ、田無駅



講師による「戦災慰霊塔(平和観音)の説明を受ける参加者たち

「講座で話をきくだけでなく、戦跡を歩いて納得できることが多いと思った」、「墓誌の記録の順番に前後するものもあり、当時の社会事情がうかがえて感慨無量でした」、「ウクライナの現実を考えさせられた。軍需工場はとくに危険なことがわかりました。若い人に語り継いでくれることを望みます」。語り継ぐことの大切さや、平和の大切さを考える講座となりました。

参加者の感想

「講座で話をきくだけでなく、戦跡を歩いて納得できることが多いと思った」、「墓誌の記録の順番に前後するものもあり、当時の社会事情がうかがえて感慨無量でした」、「ウクライナの現実を考えさせられた。軍需工場はとくに危険なことがわかりました。若い人に語り継いでくれることを望みます」。語り継ぐことの大切さや、平和の大切さを考える講座となりました。